

競技者が大会に望むこと ～ディレクター講習会から～

西日本大会に合わせて実施されたディレクター講習会。そこで筆者は、「エリートランナーの視点から大会運営に臨むこと」といったテーマの講演を担当しました。今回の講座ではその様子を紹介します。



レースを前に、地図を持った動作を意識してアップを行う道場主・松澤 (2004年10月2日駒ヶ根高原)

競技性と公平性

「私よりもずっと経験豊富な皆さんの前に立つことは僥越かとも思いますが、今日は私が国内の大会の最上位クラスや、国際大会を走る時に感じたこと・感じていることをお話します。少しでも、新しい視点を提供できれば幸いです。

私たち競技者は、オリエンテーリングで速くなる、大会で勝とうとしている人種です。そうした競技者は、大会が『練習したことをキッチリと問

る場所』であって欲しいと望んでいます。大会がそうした場所であるためには、『競技性』と『公平性』が不可欠になります。

では、『競技性』と『公平性』は何によって支えられるでしょうか。それは、

- ・良いトレイン
 - ・良い地図
 - ・良いコース
 - ・良い競争相手
- だと考えます。

トレインにも色々あり、良さもそれぞれです。特殊な課題が要求されるトレインでのレースに対しては、競技者は新しいチャレンジと考えて対策を練ることに面白みを感じることができるでしょうし、オーソドックスなトレインでのレースに対しては『確かな基礎力が試される』と考えて地道な準備を重ねることになるでしょう。大会を運営する側からすれば、まず、トレイン情報を適切に示すことが大事になります。

地図の良さの決め手となるのは、『精度の高さ』と『表現力の豊かさ』です。トレインの中には、植生を始めとしてすぐに変わってしまうものもありますから、『精度』は地図の『鮮度』に大いに左右されます。

トレインが良く、地図も良ければ自然と良いコースが組める可能性が高くなります。ともかく、トレインの持ち味を十分に引き出しており、多彩な課題への対応を競技者に問うコースが良いコースと言えるでしょう。

最後に『良い競争相手』という要因を挙げました。競技者にとっては、強い相手や互角な相手が大会に参加していることも『全力を尽くそう』という意気込みを持つ上で大切な要因になります。そしてその人数が多いほど意気込みは高まりますから、大会の主管者には、自分だけでなく、多くの選手に『この大会に出たい』と思わせるPRをして欲しいと思っています。」

4条件のバランス

以上、良い競走をするための条件を大きく4つ挙げました。日本代表のチームメイトともよくこういふ話をするのですが、最近では4つの条件のバランスに少し変化が起きていると感じる

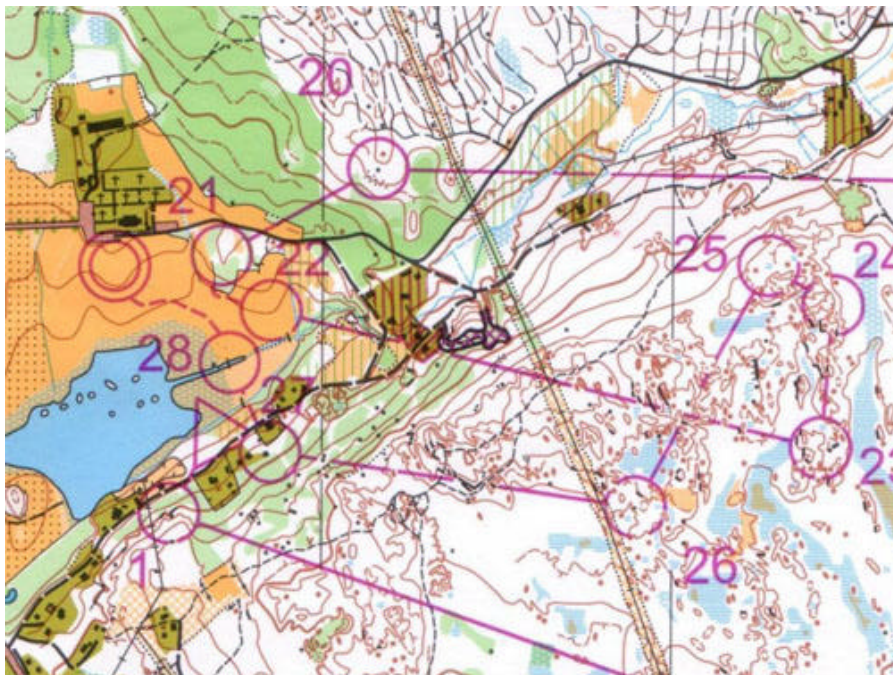
ことがあります。というのも、近年選手の側も『正確な地図を使って良い選手同士が競い合えば、どんなトレインでやったとしても良いレースになる』という認識を持ち始めているからです。

オリエンテーリング競技会の最高峰・世界選手権を例に取りましょう。世界選手権は現在『スプリント』『ミドル』『ロング』『リレー』の4種目で競われています。長らく『クラシック』と呼ばれたロングとリレーの2種目という状態が続いていましたが、1991年に『ショート』が導入され、さらに2001年に『スプリント』が加わりました。その後ショートが発展的にミドルに変更され、現在に至っています。世界大学選手権(ユニバーシアード)やワールドカップシリーズもこの4種目で競われていますし、JWOC(ジュニア世界選手権)も近い将来スプリントが加わって4種目になることが見込まれています。

全日本選手権として行われているのはロングとリレーの2種目ですが、北欧の国などでは国内選手権で全ての種目が設けられています。中には、ロングに相当する『クラシック』と、より一層長い『ロング』の両方の国内選手権がある国も存在します。

かつてオリエンテーリングのチャンピオンは『King of Forest』と言われたものですが、今は森ですらない場所でチャンピオンが生まれる時代になりました。ご存知のとおり、スプリントは『公園』や『市街地』などで行われることもあるからです。現に2003年、スイスで行われた世界選手権のスプリントは『市街地』の中、建物の間をどう縫うか、あるいは迂回するかといったルートチョイスを迫るレグがふんだんに盛り込まれたコースで競われています。2001年のフィンランドや今年のスウェーデンでの世界選手権スプリントも、市街地ではないまでも我々がスカンジナビア諸国のオリエンテーリングに抱くイメージに合ったトレインではなく、単なる集落の裏山といったトレインで行われました。

スプリント以外の種目についても、近年の世界選手権ではもしかしたら競技性の観点からは『最高』とは言えないかもしれない、というコースが組まれています。2004年は決勝に関しては



世界選手権 2004 男子ロング決勝のコース

全てが会場スタート会場ゴール、そして中間に会場付近を通過するという設定でした。そのため、コースはコンパクトで入り組んだものとなっていました。

かつては、ロングといえば新聞紙のような大きな地図の端っこの、遠くの山からスタートし、逆の端のゴールにヘトヘトの状態で駆け込んで来るようなコースが生まれ、ある種ロマンを感じさせられたものです。一方、こちらは(図を参照)2004年のロング男子決勝のコース図です。ご覧のとおり、回る順番を間違えないか、特に1番と間違えて27番に向かってしまわないかと心配になるような形状です。まあ、パブリックコントロール通過までは『さすが』『これぞ』といったロングレグが組まれており、ゴールの際はやはり多くの選手が消耗し切った状態でしたが。

ともかく現在の国際大会では、幾分競技性を損ねているかもしれないと感じさせるトレイン選びやコース設定が行われています。理由は、『演出』を施し、オリエンテーリングという競技をPRするためです。オリエンテーリングを『見えるスポーツ』『観るスポーツ』『魅せるスポーツ』にすることにより、一般からの認知度や人気、そしてスポンサーからの資金を獲得する狙いが優先されているのです。」

(世界選手権を観戦された受講者の方から)

「今年の世界選手権のスプリントや

リレーは、観戦料が60クローネ(約千円)するというのに、何千人もの観客がいましたね?」

「はい、しかも併設大会はなく、純粹に『観る』ためだけにそれだけの人数が集まっていました。さらにスプリントは平日の開催だったにも関わらず……。日本代表選手たちも、『愛知でもこれぐらいの観客が集まって応援してくれたら、普段以上の力が出せるに違いない』と話していました。

もし、『会場がスタート』『パブリックコントロールの設置』という制約がなければ、コースはもっと自由に組めることになります。もしかしたら、走った時によりナビゲーションの醍醐味を感じられるのはそちらのコースかもしれません。でも、『魅せる設定』は、スポンサー云々の他、選手が応援を受けて力強い走りをする、そういう姿に触れて私のような競技者が『決勝を走りたい』とトレーニングの意欲を掻き立てられる、代表以外のオリエンテーリング関係者も『この競技に関わっていて良かった』と誇りに思える、といったプラスの状況を作り出しているのも確かです。愛知の世界選手権はどういうコース設定になるのでしょうか。期待しましょう。」

良い大会は人を育てる

「仮にトレインやコースは多少犠牲になったとしても、『良い地図』は良い競技会のために欠かせない条件です。日本でも、2000年に開催されたワールドカップで『勢子辻』という傑作地図

が登場しました。現在も世界選手権に向けて、愛知では次々に素晴らしい地図が生まれています。そうした国際大会開催の影響もあり、海外からプロのマッパーが来日する機会が増え、国際大会だけのためではなく日本各地の大会のために良い地図を作成するようになりました。

そうした良い地図は、競技者の良い走りを引き出します。私も大学生の技術指導を行うことが多いのですが、近年の学生は基礎技術を身に付けるのが早くなったと感じます。今後インカレに出て来る学生は皆、2000年ワールドカップ以降に入学していますから、オリエンテーリングを始めて以来ずっと、合宿や練習会も良い地図を使って行っているはずですよ。

かつては、ロスタイムがあったレグに対しても『ここは地図がおかしかったのかもしれない』の一言で済ませていたこともあったでしょう。しかし、今、地図はおかしくないのですから、自分の技術が及ばなかった点が浮き彫りにされます。すると反省が即時適切になされ、課題が明確になります。そして課題をクリアするための練習を設定する際も、良い地図を使えばコントロールを置ける場所が多くなり、新しいレグが組みやすくなります。このように、良い地図を使えば使うほど、効率良く技術を身に付けることができるのです。

良い地図で走れる機会が多いおかげで、私も含めた『今時の若いオリエンティア』は、地図に対する不満を口にすることが多く、皆さんからは生意気に見えるかもしれませんが……。まあ、望むべきだと思いますが……。日本のオリエンテーリング界がこうした流れの中にあるのは事実です。そして、2005年の世界選手権愛知開催を機に、こうした流れが一層加速されるものと思います。恐らく来年の夏以降、世界選手権の本番に使われたトレインが練習に使えるようになるでしょうから。

良い地図は競技者の良いパフォーマンスを引き出します。今年の世界選手権スプリントは、0.1秒単位の計時で同タイムの2位の選手がおり、男子の銀メダルは2人で分け合われることになりました。地図の良さが極まれば、互角の選手が互角の好勝負をまっとうできるということを示す好例だと思います。

さらに、良い地図は競技の感動場面

を支えるだけでなく、地図調査をする上でも『良いお手本』になります。日本では数多くの大学大会が行われており、毎年毎年何人もの新たな調査者が誕生しています。日本ほど多くの人が地図調査を経験する国もそう多くはないだろうと思えるぐらいですが、そうした調査者の卵たちが世界標準の精度や表現力で描かれた地図に触れた後に調査を開始すれば、日本のOマップ全体のレベルアップにつながると思われる。そして、それがまた競技者のレベルアップに結び付くことが期待できます。上位クラスを走る競技者だけでなく、あらゆる世代・あらゆる習熟度の競技者のレベルアップに、です。初心者だって、初めて触れたOマップの精度が高ければ高いほど、オリエンテーリングという新しいスポーツへの興味が深まるはず。です。

世界選手権開催は、日本のオリエンテーリング関係者にとって色々な意味で大いなるゴールであり、大いなるスタートであると思います。

以上、普段エリートクラスを走る者の視点から大会に望むことをお話させていただきました。私も大会を走るだけではなく、運営者として大会を提供する側に回ることもあります。今日述べたことは、常に頭に置いておき、皆さんが大会に参加して下さる際には良い思いをしていただけるように運営したいと思えます。」

質疑応答

Q 世界選手権のコースにはバタフライループ(註: 図を参照)が見受けられました。何のためにあるのでしょうか? 折角選手が何回も通るのに、TVカメラが置かれて

いるわけでもなかったようですよが……。

A (講習会メイン講師の村越真氏より)

追走の防止のためです。かつて3分間隔でスタートしていたロングが、見ていてテンが良く感じられるという演出上の理由から、2分間隔でスタートすることになり、前の選手をとらえ、追走・並走状態が生まれる可能性が高まりました。特に、現在は予選の順位とは逆の順番でスタートしますので、力の接近した好選手同士の追走・並走が起こることもあり、そうすると全体の結果に及ぼす影響が大きくなります。

このバタフライループを回る順番は、交互に変えています。AループBループの順に回る選手の前の、そして次のスタート順の選手はBAの順に回ります。つまり、同じ順に回る選手のスタート間隔は4分となるわけです。

ただし、これまでの世界選手権を見る限り、あまり有効に機能していないように思えます。

(以下松澤)

これなども、個人戦でありながら同じ順で同じレグを回っていないわけで、『競技性』という観点からは疑問符が付くかもしれない、といった設定です。とはいえ、『追走による利益が生まれる可能性を抑える』という目的で行われているのですから、『公平性』の保証には適しているとも言えます。ともかく、先ほど村越講師から説明があった理由から、世界選手権ロング男子コースでは2001年・2003年・2004年と3回

連続、女子コースでも2004年にはこうしたループが取り入れられています。

Q 世界選手権では、全コントロール有人となっているのですか?

A 今年も、コントロールの間近とは限りませんが、必ずコントロールの見える位置に人がいました。パンチが電子化され、紙のチェックカードの頃と違って、コントロールを回る順番の不正を監視する必要はなくなったと思いますが、コントロールがいたずらされたり、持って行かれたりということを防ぐために係員を付けているのだと思います。

Q エミット社のEカードと、スポーツアイデント社のS Iチップ、どちらが良いとお考えでしょうか?

A (松澤)

個人的な好みでお話すると、Eカードです。S Iを好まれる方は、よく『方向性を問われない』ことを利点として挙げています。ただ、私から見れば、確かに水平方向に関してはそうだけれども、垂直方向には『真っ直ぐ真上から挿すしかない』という制約があり、やはり『方向性を問われている』ように感じます。ですから、例えば段差の上に設置された、上面が見えない状態のステーションにパンチする時、読図しながら挿したい時などにはストレスになります。読図しながら挿そうとして、穴でない所に当たる『カッ』という音を聞いた時の虚しさときたら……。そういう際でも、Eカードのほうは手探りで滑らせれば何とかはめ込むことができます。

(村越氏)

私も個人的にはEカードです。エリートランナーにはEカードを好む選手が多いように感じます。松澤が話した意見の他、S Iにはバグの可能性が指摘されているため、信頼し切れていないという理由がもう一つにはあるようです。実際、国際大会でもS Iを使ったレースでは原因不明の不通過判定がなされることがしばしばあります。この辺りについては改善がなされることを望んでいます。」

(松澤俊行)

